

『せつきやうかるかや』における敬語ゴザアルについて

水 野 恵 子

1 はじめに

説経正本の最も古い版本は、江戸時代初期、寛永八年（一六三二）しやうるりや喜衛門板の『せつきやうかるかや』である。そしてこの寛永八年版より古いものとして、横山重氏によって紹介された絵入り写本『せつきやうかるかや』がある（注¹）。

同書の書名『せつきやうかるかや』は表紙を欠くために、寛永八年版にならった仮題である。氏は寛永八年版が舞台での人形を遣う説経浄瑠璃台本としての性格が強いのに対して、本書は操り導入以前の古い説経の姿をとどめた室町時代末期の正本ではないかと推定された。そして説経伝本中、この『荊萱』だけが最古最上の写本と、最古にして完全な刻本を持つと特筆されたのである（注²）。

絵入り写本には高野山のいわれを語る物語を欠く反面、寛永八年版にない、刈萱道心の法然上人に対する「御経づくし」の誓文があるなどの違いがある。が二書は同一系統のものらしく、寛永八年版も絵入り写本も太夫名を欠いているが、同じく初めて説経に操りを取り入れた大坂与七郎につながる人物の正本かもしれないという（注³）。

説経は万治年間以降（一六五八―）浄瑠璃の影響により大きな変化を見せるが、それ以前の本来の説経らしい作品を古説経、初期説経という。両書はまさにそれで、内容的に大きな相違はなく（注⁴）、文章にも古説経に特徴的な表現がある（注⁵）。内容段落の独特の語り収めの常套句が多くあるのも、いかにも野外の唱導説経の語り口を彷彿させるものである（注⁶）。

両書で異なるある「高野の巻」や「経尽し」も、実ははめ込み自由の段落で、段落相互の不自然なつながりの語句を検討すると、たまたまここでの取捨選択の違いが本文の異同として現れたのではないかという指摘がなされており（注⁷）、両書の間には特に深いものがあるようである。

それでは敬語に関して二つの書にはどのようなことがあるだろうか。本稿も前稿（注⁸）と同様方法で説経の代表的作品、『刈萱』のゴザアルを取り上げ、そこから説経の敬語の特色を見ようとしたものである。

敬語の歴史の変遷を考えると、聞手に対する敬語―対者敬語は時代が下れば下るほど多くなり、近代敬語はこの丁寧語の発達ということで特徴づけられる（注⁹）。

ここで取り上げるゴザアル・ゴザルは、盛んな勢いにある丁寧語中、

室町時代末から江戸初期にかけて最も高い敬意を表していたものである。

正保三年（一六四六）大蔵虎清校訂の狂言台本『虎清本』は、ゴザアルを用いており表現に古格を残す。次の例は大蔵流狂言本「きんや」の一節である（注10）。

あ「申し〜」して「や、。こちの事か何事ぞ あ「こなたの御事で
b御ざある。れうじなる申事ながら。これはどれからどれへの御出で
a御ざあるぞ して「いやそれがしは。此あたりのものじやが。のあそ
びに出てすよ あ「さては御ゆさんにおいで、a御ざあるか。それか
しもゆさんに出てb御ざある。

会話の形で物語られる『天草版平家物語』（二五九三年）はゴザアルが少しあるが、ゴザルがほとんどである（注11）。次はその例である（注12）。

実盛が（中略）都を出さまに宗盛へ参つて申したは…一年東国（ひとせ）の
軍にまかりくだつて、駿河の蒲原（かんばら）から矢一つをも射いで逃げのぼつ
てb御ざあることは、まことに老後の恥辱ただこのことばb御ざある…
今度北国（ほくごく）へ向ふならば、年こそよつてb御ざありとも、まっ先をか
けて討死をつかまつらうずる…（144〜145頁）

建礼門院は秋のはじめまでは、吉田の御坊（ごど）にa御ざつたが、ここ
もなほ都近うて、たまほこの道行き（みちゆき）人の一目もしげし…（311頁）

右の引用文のゴザアル・ゴザルには傍線を付し、各々aを尊敬語、b

を丁寧語として示したが、bの多いことが分かる。ゴザール・ゴザルは、『天草版平家物語』の典拠である寛一本平家物語には用いられない口語的語彙である（注13）。

本調査のテキストとしては横山重編『説経正本集』第一・第二に収められた、絵入り写本『せつきやうかるかや』（略称―絵入り写本）と寛永八年版『せつきやうかるかや』（略称―寛永八年版・寛永版）を用いた。またさらに同書の江戸板木屋彦右衛門板『かるかや道心』（略称―江戸版）も比較の資料としたところがある。この書は刊記が不明で太夫名も明らかではないが、寛文初年（一六六一）ごろの刊行で、天満八太夫につながる人物の正本ではないかとされる。すでに浄瑠璃の影響を受けて六段構成になり寛永版のような古態はないが、なお説経特有の調子は残存している（注14）。

説経ではゴザルではなくゴザアルが一般的で、ギリシタン物や狂言のようにゴザルに統一されてゆく（注15）こともなくて姿を消してしまう。『刈萱』では寛永八年版にゴザルが一例ある。（各例文の後の（ ）中にテキスト頁数を示す。）

ち、ここにたつねあふたらは、なきけをとつてめされいと、ことつて
あつて御さあるか、ち、はこのよに御さらねは、あひてしまにま
いらする、（28）

これはゴザルが打消のゴザラヌの形で現れたもので、絵入り写本の方では単にナイを用いる。数が少ないので調査では特別に断らないかぎり、

「ゴザアル」の中にゴザルを含めた。また打消形ゴザナイはゴザアルの中に入れて扱ふことにする。

注

- 1 横山重『説経正本集』第一・第二 解題(角川書店 一九六八年)
- 2 横山重『説経浄るりの諸本』(『文学』一九六七年十月)
- 3 室木弥太郎『説経集』解説(新潮日本古典集成 一九七七年)
- 4 「大まかな結論をいえば、(絵入り写本と)寛永版とは非常に似ていて、その間三、四十年の隔たりがあるとして、それが信じられない位である。」(室木弥太郎『せつきやう』研究の展望)『文学』一九七四年九月)
- 5 伊勢方言らしい助詞「てに」や尊敬表現の「おーある」、文末の「じゃもの、まいか、の、や」、命令表現文末の「い」等が多用されている。(高野辰之「近世の語り物」『文学』一九三四年二月)
- 6 随所に見える「これは、——の御ものかたり、さておき申」のような語句は物語を構成する段落の区切りを明確にし、今何の物語をどのあたりまで語っているかを知らせて往來の者を誘う働きをした。(徳田和夫「説経説き」と初期説経節の構造)『国文学研究資料館紀要』第二号 一九七六年三月)
- 7 阪口弘之「説経『かるかや』と高野伝承」(『国語と国文学』一九九四年十月)
- 8 拙稿(1)「説経祭文『三庄大夫』の敬語ゴザル・ゴザリマスについて」(『早稲田日本語研究』第四号 一九九六年)

以下の引用では水野(1)、(2)のように記す。

- 9 古代の敬語には尊敬語・謙讓語はあつても、品格を保持するための敬語や聞手を尊敬する敬語が発達していなかった。中古に入つて初めて本来謙讓語の「侍り」が丁寧語化し、中古末には「候」が同様に聞手尊敬の語となる。そうして室町時代後期には丁寧語ゴザアル・ゴザル・オリヤル・オチャル・マラスル・マスルが生まれて、「候」に交替する。近世以後はゴザル・ゴハル・ゴアル・ゴザンス・ゴンス・ゴザリマス・ゴザイマス・デス・マス(ル)・ヤンス・アス・ンス等々、多様な変化形を生み、現代語ではゴザイマス・マス・デスが丁寧語・丁寧語(美化丁寧語)の中心をなしている。(柳田征司『室町時代の国語』東京堂出版 一九八五年 二〇七―二一〇頁、山崎久之『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院 一九九一年 一〇頁) ○頁)
- 10 古川久『狂言古本二種』(わんや書店 一九七三年 三五頁)
「あ、して」は「アド、シテ」の意。
- 11 ゴザアルが変化したゴザール(gozaru)が一〇例ほどある。(近藤政美伊藤一重・池村奈代美『天草版平家物語索引』勉誠社 一九八二年)
- 12 亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』(吉川弘文館 一九六六年)
- 13 江口正弘『天草版平家物語の語彙と語法』(笠間書院 一九九四年 七八、八二頁)
- 14 横山重『説経正本集』第二 解題(角川書店 一九六八年)
- 15 蜂谷清人『狂言台本の国語学的研究』(笠間書院 一九七七年 二〇―三四頁)

通情報学部創立記念論文集』一九九七年)

林田明「古本狂言文の詞章―虎清本と虎明本」(『近代語研究』第二集 一九六八年)

小林賢次「版本狂言記におけるゴザル・オリヤル・オチャルとその否定表現形式」(『近代語研究』第六集 一九八〇年)

同「言語資料としての天理本『狂言六義』―ゴザアル・ゴザル、マラスル・マスル、サラバ・ソレナラバの分布から―」(『近代語研究』第八集 一九九〇年)

2 文章の比較とゴザアル用例数

絵入り写本、寛永八年版、江戸版の『刈萱』の実際の文章を次に示す。引用部分は女人禁制のために母を残し石童丸が一人高野山に登って父を探す箇所、この次の段落が父重氏(荊萱道心)と石童丸の出会いの場になる。三書の会話・心語部分の括弧表示「」と番号は筆者が付したものである。本文の傍注は「」に入れて示し、節付けは省略した。また寛永版・江戸版では、筆者がかな表記を適宜漢字に改めた。

○絵入り写本

みだい、このよしきこしめし、①「さてみつからは、それならば、
ゑのほるまいかの、かなしやな、あのこ壱人、のぼさうか、さりな
から、あのこはの、は、かたいないに、七月はんの御ときに、すて
られし、みどりこの事なれば、げんさい、ち、に、たつねおふたり
とも、ゑみしるまいの、かなしやな、そのぎとでも、くるし「マ、」

なし、明日はとく、御山ゑのほらいの、いしだう丸」と、ありけれ
は、いしたう丸、きこしめし、②「さらはこしらへのほらん」と、
申たまひけるか、あらいたわしや、おみたいは、いしだう丸をちか
つけて、③「やあくゝいかに、いしたう丸、ち、にたつねおふたり
とも、又はたつねあわすとも、一両日たつねてに、やかてもどらい、
いしだう丸、おやまにながいをつかまつり、は、におもひを、かく
るなよ、いしだう丸」とありければ、あらいたわしや、いしたう丸、
ごかうに天もひらくれば、たびのしやうぞく、めしかゑて、おやま
ゑとてこそ、のほりたまふ、おやまから、おひちりは、五人つれで、
おくだりある、いしだう丸はきこしめし、④「あの五人のそのうち
に、ち、だうしんや、御さあるの、とははや」など、おほしめし、
よなくさかを、のほりある、⑤「のうく、これなるおひちりさ
ま、ものかといたう御さあるの、さてこの山に、だうしんひちりや、
御さあるの、御そんちありて、御さあらは、おしゑてたまわれ、お
ひぢりたち」五人つれの、おひぢりたち、このよしをきこしめし、
⑥「さてこれなる、おさないものは、おかしいもの、といやうか
な、五人も、みなだうしん」と、どつとわろうておとおりある、い
したう丸は、これをき、⑦「しらねはこそそのといごとよ、おしへ
ぬ人こそ、じやけんや」と、よなくさかを、おのほりある、いそ
かせたまゑは、ほどもなく、かうやのみねにそ、おつきある、あら
いたわしや、いしだう丸、おひちり壱人ちかつけて、いんないのか
すを、おといある、おひちり、このよしきこしめし、⑧「七、四十
九いんなり、中のほうと申てに、およそたひしの、きたの御もんゑ

も、九百九千人」とこそ、おこたゑある(422-423)

○寛永版

御台所は、与次に大きに脅されて、①「その儀にてあるならば、みつからはゑ上るまいかや与次殿様、あの子一人はせんもなし、あの子と申は、母か胎内に、七月半にお捨てあつたる若なれば、現在父に会ふたりとも、我が父ともまた我が子とも、ゑ見知るまひよ不便やな、上せまひか」と思せとも、②「いかに石童丸、お山に上り、一両日か二両日は尋ねてに、尋ね会ふたりとも又は会はずとも、または上るとも先つ下れ、母に待ち兼ねさせてたまわるな、いかに石童丸、御身か父の印には、筑紫言葉をよく名乗れ、筑紫言葉があるならば、衣の袖に取りついて、よきに教訓申てに、これまで御供申さいよ、門出てよふて物よふて、やかて下らい石童丸」と、いとま乞ひをなさるゝは、事かりそめとは思せとも、親と子の生き別れとは、後こそ思ひ知られたり、石童お山へを上りあるか、お山より五人つれたるお聖の、麓の宿へ御下りあるか、不動坂にてお会ひある、石童丸はご覧して、③「さてもうれしの御ことや、あのお聖のその中で、父道心やましますか、問は、や」とおほしめし、④「なふ〜いかにお聖さま、との院内にか、つくりやうの道心聖のましますか、教へてたまはれお聖さま、」お聖このよしきこしめし、⑤「これなる幼ひは、をかしきもの、問ひやうやな、この山にいるものは、かう申五人つれの聖も、道心者にて候」と、一とにとつとそ笑ひける、石童丸このよしきこしめし、⑥「知らねはこそその問ひ事よ、教えぬもの、邪見や」と、お山へを上りなされてに、法師一人近づけて、

○江戸版

院内の数を問ひあるか、⑦「七々四十九院内」、⑧「坊の数は」と問ひある、⑨「七千三百余坊なり」、⑩「法師の数は」と問ひある、⑪「をよそ大師の御金文にも九万九千人」と教へたまふ、(24-25)

さる間、御台石童丸を近付て、①「いかに石童、御身は眼前の父に会ふたり共、え見知るまいは治定也、御山へ上りて有なれば、御身か父は筑紫言葉也、御僧の中に、筑紫言葉の有なれば、父と思ひ、名乗り対面仕り、御供申て参るへし、父御に会ふとも会はず共、又は上るとも早く帰れ、御山に長居して、母に思ひをかけさいな、名残り惜しの石童」と仰せける、若君は聞召②「いとま申てさらは」とて、かむろの宿を出給ひ、高野をさして急かれしは、長の別れと聞えける、去聞若君は、御山になりぬれば、不動坂に付給ふ、聖一人に行き会ひ給ふ、若君はご覧して、③「あの御僧に、院内の數問ははや」と思召、④「いかに御僧様、ものか問ひたうさふらふ、御山の院内はいかほとそ、法師は何ほと」、問ひ給ふ、聖聞召、⑤「院内は九百九十九、院内坊は九百九十九せんけん」と、語り捨て、そ通らるゝ、(47-48)

絵入り写本の語りは寛永版よりもなお素朴であるが、両書の詞章は似ている。これに対して江戸版には大きな違いがある。会話部分についても絵入り写本が八箇所あり、寛永版は一一箇所というように、丁寧に物語られるのに対して、江戸版では五箇所に減じて話の筋をたどることに急である。

しかし古い二書も敬語に関していえば、絵入り写本にはゴザアルが四例あるのに、寛永版には見出せないというような違いがある。江戸版にも見えない。

そこで三書全体のゴザアルの用例数を調べると、次のようになった。

	〈地の文〉	〈会話文〉	計
絵入り写本	14	87	101
寛永版	6	49	55
江戸版		3	3

右の表を見ると絵入り写本ゴザアル一〇一例が寛永版では五五例に減少している。そして江戸版は三例で、ほとんど消滅といってもよいような状況である。

底本三書の頁数を見ると、絵入り写本、寛永版では各々約三二、三頁だが、絵入り写本は絵による空白部分が多いので、全体としては寛永版より五、六頁分少なくなるのではないか。頁数あたりのゴザアルは絵入り写本の方がさらに多いことになる。江戸版は二〇頁であり、前二書に比してかなり内容の縮小がある。

以上のことから古い絵入り写本と寛永版が近いのはもちろんであるが、その両書もゴザアルに関しては相当の違いがあることがわかるのである。

3 絵入り写本における用法

『虎清本』や『天草版平家物語』でも自分のことや一般の物事に対して使われる丁寧語ゴザアル・ゴザルが多かった。しかしまた本来の尊敬語の用法もあった。説経の場合はどうであろうか。

以下は絵入り写本におけるこの語を本動詞の場合はその意味から、補助動詞の場合は他語との接続から分類して、用法の検討を試みたものである(注1)。

引用文には必要に応じて()中に動作の主体や会話、心語の話手を入れ、(話手↓聞手)のようにも示した。(以下例文傍線は筆者による。)

I 本動詞の用法

(1) 「いる」の意味

(a) かうやの山に御さある、ち、だうしんは、わかおさないものか、なにほとに、国をもちなす、よそなから、見てまいらばやと、おほしめし、(433)

(b) (都の道者↓重氏) きてもこれなる、わかさふらひは、きのふも、これに御さあるか、又きふ(マ、)も、これにましますの、(409)

(c) (石童丸↓母御台所) ち、さる、うきよに御さあらは、あねのちよつるひめと、それかきに、少のひまをたまわれの、(417)

(a)の〈地の文〉ゴザアルの敬意の方向は、登場人物重氏に対するもの

だろう。

〈会話文〉の(b)は話し相手―対称の人物を、(c)は第三者―他称の「父」を尊敬していると考えられる。二三例(地の文 四例、会話文 一九例)があるが、すべて尊敬イラツシャルの意味である。

(2)「ある」の意味

それもこゝに、御さあるの、まつにしは、西方ごくらくとて、こゝにては、きよ水なり(407)

右文の主語は「俗人も参詣できるような寺」である。〈会話文〉中三例あるが、みな丁重語化している。

(3)「行く・来る」の意味

(a) (御台所) しけうち殿の、ひとまどころへ御さありて、しけうち殿の御すがた、上からしも、下からかみえと、二三ど四五度、みやげ見おろし、御らんじて、(403)

(b) (法然上人↓重氏) かうやに、こゝろとまらすは、又このてらゑ御さありて、よくく御しやう御ねがいあれ、たうしんいかに(414)

「来る」の例は(b)の一例しかないが、これら「行く・来る」の例はすべて尊敬の意味である。一二例(地の文 八例、会話文 四例)ある。

II 補助動詞の用法

(1) 形容詞・形容動詞また同じ活用型の助動詞に接続するもの

(石童丸)のうく、これなるおひちりさま、ものかといたう御さあるの(422)

すべてが助動詞タイの、「ものがといたう御さあるの」(三例)で対者敬語である。

(2) 接続助詞テとともに用いる(テゴザアル)

(a) (石童丸↓上人) 御そんちありて御さあらは、おしへてたまわれ、御しやう人さま(419)

(b) (千代鶴姫) は、うへさまの、よるく御申ありたるは、いしたう丸か、せんしん「せいしん丸」したるものならば、ち、ごをたつね申さんと、御申ありて御さあるか、さても今夜のよのうちに、しのびいさせたまひたか(417)

(c) (石童丸↓与次) いや是は、は、のそとはにては御さないの、さてもは、うへさまは、なにとならせて御さあるの(429)

(d) (重氏↓法然) は、のたいないに、七月はんのみどりこを、すて、まいりて、御さあるか、このこかうまれ、せん「マ、」じんし、は、もろともに、このてらゑ、たつねてまいりてよ、(413)

ゴザアル本来の存在の意味に強弱があるが、テゴザアルには尊敬用法がある。

テアルの敬語表現がテゴザアルである。(a)は現在の動作の存続、(b)は過去の常習・慣例、(c)は動作の完了、結果の残存、(d)は過去の経験・出

来事を示すものになるだろう(注2)。

待遇表現上の尊敬、丁寧の区別は、テゴザアルが接する動詞の動作主体によって決まる。(a)は対称の人物が「御存じでいらっしゃる」の意味、(b)(c)は他称の動作に付いたものである。ゴザアルの用例を見ると、対称・他称の人物の動作で尊敬語を伴う場合がほとんどである。(d)は自称の用法である。

ここでは便宜的な分類として、テ(テハとなる場合もある)に続くものは補助動詞に入れた。現代語ではテイル・テアルは融合した一つの助動詞のようになり、この単位で主語の性情の違いや動作・作用の進行、結果、状態などを示す。だが右の例のような場合は、まだ助詞テに融合しないで存在の意を表している段階とも考えられる(注3)。

しかし(c)(d)では存在継続の意味は希薄になるが、(a)から(d)に連続する表現法としては、ある事実を直叙せず、そういう事実が存在すると婉曲にいうことで敬語としての働きをなしているといえる。これは話手自身の動作についても、対者への慎重深い言い方となる。

ここでは、(a)(b)(c)のような、詞的な尊敬の意味と辞的な聞手に対する敬意とが融合している例を補助動詞の尊敬語として扱い、(d)のように聞手への敬意をより直接に表すと考えられるものを補助動詞の丁寧語として扱った。

もう一つの問題は少例しかない「地の文」の場合である。

- (e) あらいたわしや、いしだう丸は、げんざいち、に、御あいなされ
て御さあれと、これをち、とも御そんちなし、(427)

右は(d)と同じ用法であるが、待遇表現としては語り手から聴衆への敬意を表すものではないかとも考えられるのである。これを結局登場人物に対する尊敬語としたのであるが、そのことについては後にまた述べることにする。

以上テゴザアルは計三五例(地の文 二、会話文 三三)で、尊敬は一九例(地の文 二、会話文 一七)、丁寧一六例は「会話文」のみである。

(3) 断定の助動詞デとともに用いる(デゴザアル)

(a) (重氏↓道者) みやこのだうしやで御さあるか、さてそれかしと申するは、くにを申せは、これよりも、くさぶかき、大つくしのものにて御さあるが(409)

(b) (相弟子実重氏↓石童丸) さてかう申ひちりは、ししやうが一つで、あいでして御さあるの、(425)

断定の助動詞ダの連用形デ(デハとなる場合もある)につくものである。

(a)は話相手―対称に用いたもので、現代語ではすでにこのような場合、ゴザイマスを使うことはできない。尊敬語イラッサルと丁寧語マスをういて「(あなたは)都の道者でいらっしゃいますか」のようにいわねばならない。

(b)は自称に用いたものである。デゴザアル、ニテゴザアルでは、いちだんと存在の意味が薄れ単なる肯定判断辞に近くなっている。

デゴザアル計一四例は〈会話文〉のみで、尊敬二例、丁寧二例となる。
 (4) 断定の助動詞ナリの連用形ニ、接続助詞テとともに用いる(ニテゴザアル)

(a) (与次↓重氏) きていま、では、たれやの人と、おもひ申て御ざあれは、れんげばうにて御ざあるか、(430)

(b) (千代鶴姫↓御台所) いしたう丸はかりかの、ち、のこにて、御ざあるか、さて、かう申みつからは、ち、のこにては、御ざないの(417)

デの元の形のニテ(ニテハになる場合もある)についたものである。
 (a)は対称への例なので「蓮華房でいらっしゃいますか」の意、尊敬はこの例だけである。(b)の最初のゴザアルは他称の弟石童丸についてであり、後の例は話手自身についていうゴザアルであり、両方とも丁寧とする。

ニテゴザアル計一〇例は〈会話文〉のみで、尊敬は一、丁寧は九例となる。

(5) 御のついた漢語に接続するもの

(御台所) さてもうれしき御ことや、このちう、御一もんや、みつからか、いくせのことを申ても、ついに御しやういん御ざないか、たいないの、七月はんのみどりこの、ことを申てさふらへは、(405)

尊敬表現で打消の「御+動작성漢語+ナイ」のナイがゴザナイになっっている。尊敬表現オーアルの打消形で、〈会話文〉に一例ある。尊敬語「御承引ある」の打消は「御承引ない」、さらに尊敬表現を加えたものが「御承引御ざない」である。

注

1 山崎久之氏(『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院 一九六三年)、小林賢次氏(『版本狂言記におけるゴザル・オリヤル・オチャルとその否定表現形式』『近代語研究』第六集 一九八〇年)の分類、表示法を参考にした。

2 室町時代語についての湯沢幸吉郎氏の分類法による。(湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』風間書房 一九五八年 一七五〜一八〇頁、同『国語論考』勉誠社 一九五四年復刻 四六頁)

3 山下和弘氏はテイルのイル、テアルのアルが一元的に補助動詞化せず、独立した動詞であるイル・アルと、補助動詞化したイル・アルとが長い間併存していたのではないかと述べられた。(山下和弘『中世以降のテイルとテアル』『国語国文』一九九六年七月)

4 三書の用例数と尊敬用法

寛永版、江戸版のゴザアルについては検討過程を省略して、寛永八年版ゴザアルの尊敬用例の一部を次に挙げるにとどめる。各例文頭には分類ごとの本文順序を示す番号を付す。

○寛永版

I 本動詞の用法

(1) 「いる」の意味

2 もの、あはれをと、めしは、かふろのしゆくに御さありしみた
い所にて、しよしのあはれをと、めたり、(28)

7 は、うへさまは御さあるか、いしとうまるはあるか、さていか
に〜(14)

15 ましてちよつるひめも、いまはこのよに御さなふて、しこつ
をみるそかなしやな、(32)

(3) 「行く・来る」の意味

20 ちやくしのちよつるひめは、ねうはうたちにさそわれて、よ

そのはなみに御さあるか、(13)

23 そとはをかきて御さあらは、なときふに御くたりあり、は、
のしにめに御あひないそ、(29)

II 補助動詞の用法

(2) 接続助詞テにつく

26 ゆくともとると大はして、おあいあつては御さあれと、をや
かことも御そんしなし、こかまたおやともゑみしらす、(25)

28 かといてよふてものようにて、ち、こに御あひありて御さあれ
の、やかてもとれのいしとう(15)

31 くわほうめてたのいしとうまるや、たつねおあひあつて、を
くたりなされて御さあるか、(32)

(4) 断定の助動詞ニ、接続助詞テとともに用いる(ニテゴザアル)

52 いま、てはたれやの人とおもひしに、れんけほうにて御さあ
るか(30)

(5) 御のついた漢語に接続するもの(「御」が融合した語も含む)

53 それかしかことくなるもとゆひきりに、は「マ、」かなにも
の、きよい御さあれ、(7)

江戸版ではゴザアル三例がまとまった箇所に出てくる。用例は次の
とおりである。

1 何とてあね君やみつからに、母といふじはまませと、父は御
さなきそ、(39)

2 そのきにて御さあらは、あね君や某に、あかぬいとまを給はれ
や、(39)

3 石とう斗か父の子て、みつからは□□〔父〕の子にては御さな
きか、(40)

(断定) ニテ

2

2

合 計

3 (1)

3 (1)

絵入り写本から寛永版へのゴザアルの数の変化を見ると、 \langle 地の文 \rangle の一四例が六例に、 \langle 会話文 \rangle の八七例が四九例になる。寛永版の \langle 地の文 \rangle は絵入り写本の四二・九%、 \langle 会話文 \rangle では五六・三%に減少したわけである。絵入り写本、寛永版の \langle 地の文 \rangle の用例は、本動詞でしかも尊敬用法がほとんどである。これに対して補助動詞は絵入り写本では三分の一弱が尊敬用法であるが、寛永版ではその割合は三分の二強に増える。全体数からすれば、絵入り写本一〇一例中の五八例が尊敬、寛永版全体では五五例中の三八例を尊敬と見たので、尊敬語の割合は絵入り写本の五七・四%が寛永版では六九%のように高くなる。一見すると丁寧語化の流れに逆行する現象のように見えるが、これは寛永版が補助動詞の使用を減らしたことから生じたものである。ここでは両書間の相違として丁寧語ゴザアルの減少を指摘しておきたい。

注

1 同様傾向は他の後代正本にもあった。(水野②)

5 文節の繰り返し

人の集まる寺社の境内や大道で演じた説経は、「いたはしや」「あら

たはしや」のような特徴的な常套句を発達させている(注1)。説経には繰り返し句が多いが、これは耳に訴える語りにとって必要な技法であり、文章の大事な構成要素だった(注2)。

しかし絵入り写本の繰り返し句は寛永版において整理されてゆく傾向がある。これは文節という短いものから、やや長い句になったもの、ひと続きの話といった各段階にあるようだ。たとえば長いものでは、重氏二十一、御台所十九、娘千代鶴姫三歳、石童丸が七月半の胎児であったとき、重氏が出家して新黒谷に法然上人を訪ね、高野山で修行するという発端のストーリーがある。これは絵入り写本では折に触れて繰り返され合計五箇所に見えるのだが、寛永版では同じ五箇所でも省略しつつ述べるところがある。そして江戸版は「かやうくのしたい也」等と省略して、二箇所になっている。

さて絵入り写本では、ゴザアルに助詞が一つ付いたゴザアルのような文末文節が多い。このような文節は文中のゴザアルなどととも五音の句をなし、態などに乗る単純なリズムを作っていたのではないか。

ゴザアルを含む短い文節は寛永版では増えたものもあるが、減ったものの方が多い。次は『刈萱』三書のゴザアルを含む文節(文節末の助詞トは省略)を示したものである。「 \quad 」中には、絵入り写本・寛永版・江戸版の順に各々の用例数を記した。

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 ゴザアラバ〔6・5・2〕 | 2 ゴザアリテ〔7・2・0〕 |
| 3 ゴザアリタガ〔0・1・0〕 | 4 ゴザアリシ体言〔0・2・0〕 |
| 5 ゴザアッタガ〔0・1・0〕 | 6 ゴザアル(言い切り)〔1・4・0〕 |

『せつきやうかるかや』における敬語ゴザアルについて

7	ゴザアル	体言	(7・2・0)	8	ゴザアルカ	(7・4・0)
9	ゴザアルガ	(11・7・0)	10	ゴザアルゾ	(5・4・0)	
11	ゴザアルゾヤ	(0・1・0)	12	ゴザアルトノ	(2・0・0)	
13	ゴザアルナ	(1・0・0)	14	ゴザアルニ	(2・1・0)	
15	ゴザアルノ	(31・3・0)	16	ゴザアルホドニ	(0・2・0)	
17	ゴザアルハ	(1・0・0)	18	ゴザアルヤ	(0・1・0)	
19	ゴザアルヨ	(0・1・0)	20	ゴザアルヲ	(2・0・0)	
21	ゴザアレ	(0・2・0)	22	ゴザアレノ	(3・1・0)	
23	ゴザアレド	(2・1・0)	24	ゴザアレドモ	(0・1・0)	
25	ゴザアレバ	(3・0・0)	26	ゴザラネバ	(0・1・0)	
27	ゴザナイ(言い切り)	(1・2・0)	28	ゴザナイカ	(1・1・0)	
29	ゴザナイガ	(1・0・0)	30	ゴザナイゾ	(1・1・0)	
31	ゴザナイノ	(4・0・0)	32	ゴザナイヨ	(0・1・0)	
33	ゴザナウテ	(2・3・0)	34	ゴザナキカ	(0・0・1)	
計			(101・55・3)			

この中で特に目立つのは、助詞ノが付く句である。これはすべてへ会話文にあるが、絵入り写本から寛永版になって著しく減少する。江戸版にはない。

ゴザアルノ
31例
「絵入り写本」
「寛永版」
3例

ゴザアルトノ	2	0
ゴザアレノ	3	1
ゴザナイノ	4	0

このノを分類すれば、

そのうへ、これよりも、かみがたみちと申するは、人のこゝろか、しやけんにて、御身のやうなる、みめよきひめをはの、おさゑてとつて、うるるときく、(418)

右のような文節に付いたものや、文末の言い切りの形でゴザアルトノやゴザアレノと命令形に付いたものなどは、語調を整えたり感動を表す間投助詞であるが、ゴザアルノ(ダ)・ゴザアルノ(カ)のような意味に取れる場合は終助詞である。

のうく、これなるおひちりさま、ものかといたう御さあるの、さてこの山に、だうしんひちりや、御さあるの、(422)

絵入り写本にはこれらのノが多用されている。右の二例がある四二二頁には外にも、

七日七やもんどうとも、もんだいにはまけまいの／ゑのほるまいか

の／あのこはの／ゑみしるまいの／御山ゑのほらいの／ち、だうし
んや御ざあるの

と六例も出てくる。

このような助詞ノはノウと延ばされた形でも使う(注3)。時代は下るが江戸時代後期の『浮世風呂』の江戸庶民の会話中にも多い(注4)。

このノは江戸の人々にも使用され方言的とはいえないであろうが、口語的な会話に伴うもので、絵入り写本で多用されたそれらが寛永版では消えていったのである。

注

1 荒木繁『説経節』解説(東洋文庫 平凡社 一九七三年)

2 説経の語りには [] この由聞こしめし、 [] これをこ覧じて、 []
げにもと思ほしめし、あらいたわしや [] は、流涕こがれてお泣きある」
のような決まった句の単位があり、その場面に適した語句を選択し、少し
ずつの変容を加えて語る。(山本吉左右『説経節』解説 東洋文庫 平凡社
一九七三年、同『くつわの音がざざめいて』平凡社新書 一九八八年 四
〇～四三頁)

3 篠原での合戦には双方いかう死んだなう? (一四二頁) / さても平家はい
かう歩が悪かったの? (一四九頁) (亀井孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄キ
リシタン版平家物語』吉川弘文館 一九六六年)

4 六笠寿子「浮世風呂における間投助詞『な・なう』『の・のう』『ね・ねえ』
の使い分けについて」(『国文』一九五七年十二月)

6 繰り返し句の減少

次に少し長い句段階での繰り返しを見ることにする。

先の文節と重なるところがあるが、絵入り写本(略称「写」)の例文
をあげ、それに対する寛永版、江戸版(略称「寛」「江」)の本文を比
較する。平常語の場合(注記「敬語なし」)、他の敬語になっている場合、
また省略されている場合(注記「省略」)でも前後が参照できる場合の例
を挙げる。江戸版は対応する本文がある場合のみとする。

(1) 「承りて御ざあるぞ(が)」

64ゴザアル↓「寛」省略 「江」省略

「写」みやこは、らくちう、らつくわいとて、ひろきよしを、うけた
まわりて御ざあるが、ひろきみやこの、てらならば、おまゑをとを
る、大ぞく人を、(408)

「寛」みやこはらくわらくわいとて、ひろいみやこのことなれ
は、みちとをる大そくしんをも、(7)

絵入り写本で六箇所あったところが「寛」ではみな消えている。

(2) [] に御ざある [] は (も) []

23ゴザアル ↓「寛」省略 「江」省略

「写」ふもとに御ざあるおみだいわ、あのおさないものを、ちかすけ
て、(430)

「寛」みたひとところかきくよりも、それはあひてしてはなふて、(30)

空欄には適宜「場所」と「人物」の名が入る。この句は七例あったが、〔寛〕の一例だけが同じ、他は「御ざありし」二例、オハシマス一例のよ
うに替わる。三例はなくなる。

(3) 「 へ(に) 御ざありて」

35ゴザアリ ↓〔寛〕敬語なし 〔江〕省略

〔写〕かうやの山と御ざありて、ごしやうを大事に、おねがひあれ(44)

〔寛〕御みはいかなるやまてらにもとりこもり、ねんふつ申てましま

さは、(4)

「行く・来る」の意味で五例あるが、〔寛〕の当該箇所にはなくなる。た
だし〔寛〕には絵入り写本にない箇所に二例あるので、全体では三例減
じたことになる。

(4) 「むなしう(く) 御なりありて(あつて、被成て)、(むなしくなつて)

御ざあるの」

56ゴザアル ↓〔寛〕セ給フ 〔江〕給フ

〔写〕ふしぎのやまふを、うけとりて、むなしく御なりありて御ざあ
るの(425)

〔寛〕ふしぎのやまふをうけとりて、むなしくならせたまふたか、(26)

〔江〕こそその春はかなく也給ふ、(49)

家族の死を伝える語句で四例中の二例は〔寛〕でも同じ、他は別敬語
にする。

(5) 「おふそのことで御ざあるの」

85ゴザアル↓〔寛〕省略 〔江〕省略

〔写〕おふそのことで御ざあるの、あのとりと申は、ときわのくによ
りも、二つとんだるとりなれば、なをはつはめ共、申なり、(416)

〔寛〕いまたしらぬかいしとうよ、あれはときはのくにより、はるは
きてあきもとる、つはめといふとりそや、(13)

二例あるが、〔寛〕では消える。

(6) 「なさけなき御しやう人の、御しんちうで御ざあるの」

78ゴザアル↓〔寛〕省略 〔江〕省略

〔写〕さてもなさけなき御しやう人の、御しんちうで、御ざあるの、
(410)

〔寛〕おなさけなのお上人のおほせやな、(8)

二例あるが、両方とも〔寛〕ではゴザアルを消している。

(7) 「五日も十日も、それに御ざあれの」

5ゴザアレ ↓〔寛〕省略 〔江〕省略

〔写〕まつこと、かみをそりたくは、五日も十日も、それに御ざあれ
の、(408)

同文の句二例だが、この章段そのものを寛永版は欠く。

(8) 「ものが問ひたうござあるの」

39ゴザアル ↓〔寛〕省略 〔江〕省略

〔写〕のういかに、おひちりさま、ものかとひたう御ざあるの、(406)

〔寛〕いかにくはんしんひしり、みやこにてれいふつれいしやを、おしへてたまはれおひしりさま、(6)

もとの三例が〔寛〕で一例になるが、他に一例増えるので、全体では一例の減。

(9) 〔御存じありてござあらば〕

4 5 ゴザアル ↓ 〔寛〕省略 〔江〕省略

〔写〕御そんちありて御さあらは、おしゑてたまわれ、おひぢりたち(423)

〔寛〕をしへてたまはれおひぢりさま、(24)

絵入り写本のもとの三例は〔寛〕では一例に減、別箇所でも一例増え全体では一例の減。

(10) 〔〕にては御ぎない(の、ぞ、か)

9 4 ゴザナイ ↓ 〔寛〕敬語なし 〔江〕省略

〔写〕それはち、だうしんの、そとはにては御ぎないそ、ぎやくしのためと、(427)

〔寛〕これはとうしんとはなくて、ぎやくしゆのそとはとあるならば、(28)

もとの三例が〔寛〕で二例になる。

以上を見ると、寛永版は絵入り写本の繰り返し句をみな消す場合もあるが、それだけではなく一部は残す、別のところで使うというように注

意深い操作をしているようである。減じたところは結局一例だけという場合もあるが、寛永版で新たな繰り返し句の増加はない。呼びかけ、応答句の省略減少、また次のような前置きの条件句におけるゴザアルの省略は、口語的口調の払拭という点でつながっている。

7 3 ゴザアル ↓ 〔寛〕敬語なし 〔江〕省略

〔写〕いま、では、たれやの人と、おもひ申て御さあれは、れんげばうにて御さあるか、(430)

〔寛〕いま、てはたれやの人とおもひしに、れんげほうにて御さあるか、(30)

6 5 ゴザアル ↓ 〔寛〕ゴザアル 〔江〕省略

〔写〕は、のたいないに、七月はんのみどりこを、すて、まいりて、御さあるか このこかうまれ、せん(マ、)じんし、(413)

〔寛〕は、のたいないに七つきはんにまかりなる、みとりこをみすて、のほりたか、たいないのみつこかうまれ、せいしんつかまつり、(11)

寛永版では絵入り写本にない箇所でのゴザアルの使用が二九例(うち三例は「高野の巻」もあるのだが、以上のような減少傾向——特に丁寧語の補助動詞——があつて全体的には用例数を減らしているのである。

7 比較のまとめ

絵入り写本から寛永版への変化は単純ではないので厳密な比較はできないが、その大体の状況を知るために次のようなまとめを行った。

絵入り写本のゴザアルの数と寛永版のそれとの対照は記号↓で示した。寛永版が変わらず、同じゴザアルである場合は()中にその用例数を記す。新たに使用されたものの用例数は()に入れて、+記号を付して示した。別敬語になったものはその語と用例数を簡単に記した。(サウラフ・サブラフ・サムラフは「候」に入れた。) 該当語がない(「省略」)場合の表示は省いた。

I 本動詞の用法

(1) 「いる」の意味

〈地の文〉 4例 ↓ 2例 (1+(1)、オハシマス 1例)

〈会話文〉 19例 ↓ 13例 (5+(8)、マシマス 5例、オー

アル 1例)

(2) 「ある」の意味

〈地の文〉 0 ↓ 1例 (+(1))

〈会話文〉 3例 ↓ 3例 (1+(2)、候 1例)

(3) 「行く、来る」の意味

〈地の文〉 8例 ↓ 2例 (1+(1)、オール 1例、参ル 2

例)

〈会話文〉 4例 ↓ 2例 (+(2)、オール 2例、給フ 1

II 補助動詞の用法

例

(1) 形容詞・形容動詞及び同型活用 of 補助動詞に接続するもの

〈会話文〉 3例 ↓ 2例 (1+(1))

(2) 接続助詞テとともに用いる(テゴザアル)

〈地の文〉 2例 ↓ 1例 (1)、給フ 1例

〈会話文〉 33例 ↓ 18例 (9+(9)、オール 1例、セ給フ

1例、候 4例)

(3) 断定の補助動詞テとともに用いる(デゴザアル)

〈会話文〉 14例 ↓ 4例 (+(4))

(4) 断定の助動詞ニ、接続助詞テとともに用いる(ニテゴザアル)

〈会話文〉 10例 ↓ 5例 (4+(1))

(5) 御のついた漢語につくもの

〈会話文〉 1例 ↓ 0

二三の説明を加えると、I(1)では本来が尊敬語であるゴザアルは、この時代まだ自己の存在に用いる例はない。II(2)での自称の事柄について言う例は特に減る。増えた分の話し手は千代鶴姫・乳母であるが、全体的には女性の言葉にも整理が行われている。II(3)ではもともとの絵入り写本の例は全部消えている。「なさけなきごしやう人の御しんちうで御ざあるの」「おふそのことで御ざあるの」など丁寧語の消滅である。上人・重氏のことばでは平常語になるが、御台所の「候」はゴザアルになったところがある(1例)。

絵入り写本のゴザアルが寛永版・江戸版で別敬語「オハシマス・マシマス・候」になった場合があるが、三書におけるそれらの全体の数は次のとおりである。

	オハシマス	マシマス	候
絵入り写本	14	3	24
寛永版	9	15	24
江戸版	4	16	36

また「いる」「行く、来る」の意味のゴザアルが寛永版では「お伏しある」「お参りある、お急ぎある、お着きある」のようになったところがある(各一例)(注1)。この尊敬語オーアル形式は絵入り写本・寛永版両書に多数用いられている。しかし江戸版ではオーアルが激減して給フが優勢になる(注2)。

寛永版はゴザアル・ゴザル計五五例であり、『さんせう太夫』与七郎本の五〇例に近い数である(注3)。前稿では後代のゴザアルとオーアルの減少とを関連する現象と考えた。しかしながら今回絵入り写本におけるゴザアルの調査で、それにはやや修正を加えなければならない。

なぜなら両書はオーアル多用の口語的特色を持つ説経であり、寛永版ではオーアル・ーアルがむしろ絵入り写本以上に使われているのに、ゴザアルの方は絵入り写本の半分近く減するというような先行変化が現れているからである。給フは絵入り写本、寛永版にまだ各々三〇〜四〇例程度だが、オーアルは絵入り写本は約一四〇例、寛永版は「高野の巻」

を除いた残りの章でも約一六〇例を数えるのである。

絵入り写本では人物どうしの会話の丁寧な言葉遣いと、単純な繰り返し句が特色だった。話対手を意識した日常会話には丁寧語が必要で冗長な繰り返しや前置き、応答語なども不可欠だ。ゴザアルは口語らしさを生かすために必要な語であったが、そのような表現がまず整理されつつた過程を寛永版は現しているのだろう。

注

- 1 動詞連用形をオーアルに挟む尊敬語の形式は、本来尊敬を表す漢語にアリがつく「行幸あり」のような形から始まった。鎌倉時代以降に現れたこの形式は、オーアル・ーアル・オーヤル・ーヤルなどの形で室町時代以降盛んに使われるようになる。(金田弘「中世敬語と現代語」『講座日本語学』9 敬語史 明治書院 一九八一年 一六九〜一七一頁)
- 2 伊東龍平「さきをいつくとおといある——説経正本における常套句について」(『国語国文』一九六九年七月)
- 3 水野(2)

8 若松派説経節『石重丸・苅萱道心』と絵解き

前章までで当初の目的である、初期説経『刈萱』二書の敬語ゴザアルについての数値をあげての考察を終えたことになる。本章ではこれまでとやや違う観点から説経のゴザアルについて、現代の説経節と絵解きを取り上げて補足したい。

淨瑠璃に対抗して変化を重ねた説経も、享保ごろ（一七一六―）にはほとんど衰滅してしまふ。寛政代（一七八九―）、薩摩若太夫が復興した説経は古い説経演目も祭文風に変えたものであった（注1）。

ここでは江戸期説経祭文は省略して、現在の若松派説経節の『刈萱』の敬語を見ることにする（注2）。次に載せるのは、江戸時代から演じられてきた『石童丸・菫萱道心』第五段「行違いの段」の「高野山墨染衣―石童丸山廻りの段―衣掛けの段」のうちの前半「山廻りの段」の一部である（注3）。（仮名遣いは原文のまま）

「高野山墨染衣」石童丸山廻りの段―衣掛けの段

花も 雪も 払えば清き袂ぞと 加藤左衛門重氏は 高野山へ分け登り 名を菫萱と改めて 朝夕勤行おこたらず 今日は大師の御廟所へ 花立てかへの御役目 身に墨染の袈裟衣 左手に花籠 右手に数珠 光明真言唱へつ、奥山内にぞ登らる、三鈴の松や五鈴の杉 善悪二つの蛇柳や 汗かき地藏を伏し拝み 山八合目が女人堂 辿らせ給えばほどもなく 無明の橋にぞさしかゝるかゝるむこうの方よりも 杖を力に石童丸 菫萱僧の側に寄り へもうし御出家様 卒爾乍らお尋ね申しまする この御山に今道心の聖は いずれのお寺におりましよう 今日で三日尋ねます いまだに行方がわかりません あなた御存知しますなら どうぞ教えて下されと 涙乍らに尋ぬれば 菫萱は立ち止り へこれはしたり旅の若殿 そなたはこの深山の僧達を 今道心と思すのか いや へ左様な訳に候はん この御山の習い、昨日剃ったも今道心 一

昨日剃ったも今道心 或いは去年一昨年剃ったのも 皆押並べて今道心と申す 左様にお尋ねなされては なか／＼恋しき人に逢う事ならん 愚僧が良い事を教え申さん 先ずそなたの尋ぬる人の 郡家名姓名 又 尋ぬるそなたの名迄 詳しく立札に書きしるして むかうの辻 あの四辻がもとへ立て置くならば 数多登り下りの御出家がその立札を見て 逢おうと思う人は 何処の学寮 何の誰れと 裏書きをして通る さりながら 浮世を捨てたる名僧は逢うも菩提の妨げと その立札を引抜いて むかうの谷底へ捨つる事もある 昔はあの谷を世捨ての谷というたが 近頃は改めて札捨て谷と申す さ そなたも恋しき人に逢われるか逢われぬか、立札書いておかつしやれと 聞くより石童喜んで とてもの御恩に御出家様 その札を書いてくださらば 生々世々の御厚恩 偏に頼みあげますと へ若殿 易き事には候えど こゝは途中の事札墨なければ それも及ばぬ（以下略）

説経祭文の段落は短いが聞かせ所の描写が詳しいのが特色で、段落前後を優雅な句で飾っている。これも自在な旋律とリズムを生み出す三味線のような伴奏楽器がなければできない語りであろう。

さて本文は同じく会話が多い。文中の敬語表現も多く、登場人物にはへ地の文で「加藤左衛門重氏は 奥山内にぞ登らる、」「茅の御堂へ急がる、」「急がせ給へば」のように尊敬表現もあるが、文末の多くは「おこたらず／＼さしかゝる／＼登り行く／＼着きにける」のような常体になっている。石童丸にはルルなどの敬語もあるが、父菫萱道心よりも使用例は少

ない。このように意識的な相対敬語表現は初期説経と異なる。

もう一つ注意されることは、説経祭文『三庄太夫』と同様、丁寧語マスが〈会話文〉に多くあることである(注4)。

もうし御出家様、卒爾乍らお尋ね申しまする。いづれのお寺におりませう。今日で三日尋ねます。いまだに行方がわかりませぬ。

マスを交えた現代の丁寧語マスが文語文章中に現れ不統一だが、耳で聞けば今日の観客にも親しみを感じさせるものになっている。

次に「高野山墨染衣」後半からゴザル・ゴザリマスの用例を見る(注5)。

(菫萱道心)へウム若殿 そなたがこれへ寝いられたと 粗相で起したのでは御座らん こう見たところ 額にシヨッポリと汗をかいて 苦しい態に見えまする それじゃに起し申しましたがのう 夢でも見られてか (中略) (石童丸)へありがとうござります 私(病)気はござりませぬが 御推量の通り これへまどろむ枕の夢に 現在恋しき 今道心に廻り逢い よもやまの話を夢に結びしが (以下略)

ゴザル(ゴザラン)は菫萱道心、ゴザリマスは石童丸の会話中にあり、前者は男性の古めかしい言葉、後者は普通の丁寧な言葉として使い分けられている。

丁寧語ゴザル、ゴザリマス、マスは〈会話文〉だけにあり、観客に向

かつてのものではない。このことに関連して、同じ題材を扱った現代の絵解きの語りを取り上げてみることにする(注6)。

長野市善光寺の門前町にある菫萱山寂照院西光寺には菫萱親子のものと伝えられる墓があり、近世前期及び中期作と思われる二種の『御絵伝』がある。先年私も聴聞の機会を得たが、現在は両者を統一した佐藤正行氏作『菫萱道心石童丸御親子御絵伝』が住職夫人竹沢繁子氏によって語られている(注7)。その詞章は次のようなものである(注8)。

ひとりよく愛河を渡つて溺れず高線今に伝えてその徳を讃える大道心あり この尊者を念仏行者菫萱上人と申さる、

今から凡そ八百年ほどの昔鎌倉時代初期の頃大筑紫九州博多の守護職に加藤兵衛ノ尉藤原ノ重昌という武士が居られました この重昌公二人となき弓馬の達人で九州はおろか関東にも知られた豪勇の武将でございます。

この冒頭からも知られようが、文章はやはり文語、口語を取りまぜて作られている。

『御絵伝』文章中ゴザリマスの語は〈会話文〉では「ありがとうござりました」のあいさつことばの外は、次の二例しかない。

石童会いとうござりました／お父上様 情けのうござります

〈地の文〉文末は常体の箇所もある。

峰々谷々僧坊七堂伽藍のすみまで探せども父かと思ふ人もなく尋ね
あぐねてはや四日奥の院無明の橋にとさしかゝる……折しも右手に
花桶左に数珠弥陀の名号を称えくる僧侶にあう石童なぜか気
かゝり行交う二人の袖と袂がもつれあい互に見合わす顔と顔(中略)
聞いた道心持った花桶ばつたと落し石童丸の顔をしげくと眺め、
みるく涙が溢れ頬を伝う

しかし「地の文」の解説の言葉にはゴザイマスが多くあり、二〇例を数
える。

栄耀栄華を極め吾世の春を謳歌する日々でございました
領国も妻子も振り捨て、二十一才の若きで諸国修業(ママ)の旅に出
られたのでございます

境内にはお三方の墓もございます

このように文末をデス・マス・ゴザイマスで結ぶ例が多いが、常体の
箇所もあるのは語りを高揚させる技法であろう。

また善光寺に隣接する往生寺は菫萱道心の往生した寺と伝承されてお
り、同じく絵解きが行われている(注)。

内容は菫萱道心、石童丸の同様の物語で、明治末に御住職の記した文
語文章の台本がある(注)。¹⁰しかし実際には次のような語りが行われてい
るようだ(注)。

初めにこの二幅のお掛け軸によりまして、一代記の御縁起の話を
申し上げさせていただきたいと思ひます。

こちらは菫萱さん、お花見にいらつしやいまして、御発心の始ま
りでございます。菫萱上人と申されるお方は、只今から八百年ほど
昔、九州の博多の城主のお殿様で、加藤左衛門重氏と申されました
が、そのお殿様でいらつしやいます。

文語の台本とは違い、身近な聴衆を意識した対者敬語をさかんに
使用して丁寧でわかりやすい言葉遣いになっている。

両寺の絵解きに共通するのは、ゴザイマスが「地の文」の方にあ
ることだ。これは聴衆への直接的な敬意を表しており、説経の文章
とは異なる。ゴザイマスを用いれば語り手が聞き手にいつそう丁寧
に解説する口調となり、物語は聞き手からは遠くに位置づけられること
になる。常体で語られれば、聞き手は物語場面に直接向き合う感じに
なるが、現在の語り手がそれで語りきることをせず、デス、マス、
ゴザイマスを用いているのは、動きのない絵の世界に聴衆を感情移
入させることがむずかしいからだと思われる。

注

1 荒木繁「説経祭文『三庄大夫』」(一)(二)『和光大学人文学部紀要』
第二六、二七号 一九九一、九二年

2 若松派の説経正本は、二代目薩摩辰太夫、後の日暮龍ト(二八二三―
一九一七年)が、薩摩派の説経節の詞曲を改訂して作ったものであ

- る。現在若松派の演じる『刈萱』の正本は家元の薩摩若太夫直伝で十段構成の『石童丸・苺萱道心』だが、初代若松若太夫はこれを舞台に応じて要約、短縮したり、作り替えたりして演奏した。(板橋教育委員会『説経節と若松若太夫』文化財シリーズ第74集 一九九三年)
- 3 板橋教育委員会『説経節と若松若太夫』(文化財シリーズ第74集 一九九三年)「第三章 説経節の歌詞と解説」の本文による。
- 4 水野(1)
- 5 前掲書(注3)の本文による。
- 6 本来絵解きと説経とは関係が深い。同一の物語にそれぞれ視覚化、音声化、立体化の演出を行うことで、そこから別種の芸能が生み出されていったのである。川口久雄氏は絵によって物語の伝統は古くから中国にあり、それによって盛んに仏教の唱導が行われたことを敦煌出土の変文資料などにより明らかにされた。これらはわが国の宗教活動や文学に大きな影響を与えたが、また説経芸能の源流でもあった。その俗講は唱経者と講釈担当者が分かれており、変文は韻文・散文の交錯する特徴的文体を持つ。これは、かたりとうたいの要素を持つ日本の説経とも対比される。(川口久雄『絵解きの世界―敦煌からの影―』第I編「我が国における絵解き―敦煌変文からの照射―」、第IV編「国語散文の流れと物語の絵解き」明治書院 一九八一年)
- 7 竹沢繁子「絵解きして二十年」(林雅彦監修『絵解き刈萱親子地藏尊縁起苺萱道心と石童丸』苺萱山西光寺 一九九四年)
- 8 林雅彦『苺萱山縁起親子地藏尊苺萱道心と石童丸』の「絵解き」(『明治大学教養論集第二五一号 日本文学』一九九二年)の本文による。
- 9 林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』(伝承文学資料集第十一輯 三弥井書店 一九八三年)
- 10 林雅彦『増補日本の絵解き―資料と研究』(三弥井書店 一九九四年)小林健二「絵解き『刈萱』考」(『国文学研究資料館紀要』第九号 一九八三年三月)
- 11 前掲書(注3)における「長野市往生寺の石童丸の『絵解き』」の本文による。
- 二人の演者による語りの対照は、林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』(伝承文学資料集第十一輯 三弥井書店 一九八三年)で見ることができ。
- 9 終わりに
- 『せつきやうかるかや』二書の敬語ゴザアルについては、前稿『さんせう太夫』の場合とほぼ似た状況を知ることができた。ただしその詞章を検討すると、やはり絵入り写本『せつきやうかるかや』は、他の作品とは別格の古い姿を持っているようだ。
- 大道芸だった説経は親しみやすい話言葉の表現を取り入れ、膨大などの単純なリズムに合わせて、対者敬語ゴザアルも繰り返されたのだ。しかし劇場観客席の聴衆は洗練された速やかな会話の展開を好み、また三味線の伴奏はフシを複雑にして語りの興趣を深め、それにふさわしい詞章の改定が求められただろう(注1)。
- 古説経といわれる寛永版『せつきやうかるかや』にも、すでに大

幅なゴザアルの減少が生じていた。これはオーアル減少以前の両書間の相違である。さらに説経浄瑠璃の江戸版『かるかや道心』になれば、ゴザアルはほとんど消え整った文語的文章へと変わる。

本来の説経は「泣き節」といわれ、語り手自身も時に涙しつつ哀話を語って聴衆の涙をそることを特色としていた。この「説経説き」「*kyōsara* 乞食」とよばれた語り手の人々の社会的地位は低かった（注）。その現実を反映するかのようになり、語り手は姿勢をあくまでも低くし、登場人物をへ地の文で遇するときも尊敬語を多用し、登場人物どうしのへ会話文にも対者敬語を用いて丁寧な言葉遣いを見せている。説経特有の繰り返し句や敬語の氾濫も、いやおうなしに主人公への同情を促すという働きをなしていた。しかしこのような語り方に後代正本は抑制的で、特に説経祭文やこれを源流とする現在の説経節では、変化に富んだ敬語表現により登場人物を平常語で遇する箇所も多い。

検討の過程で『せつきやうかるかや』へ地の文のゴザアルが聴衆に向けての丁寧語ではないかという疑問があった。そして「高野の巻」で御台所と石童丸に向けた与次の言葉のゴザアルや「候」などは、聴衆に対する実際の語り方の反映のようにも思える。

いかに上らうさまに申へき、かうやのまきとやらんを、そつとちやうもん申て御さあるほとに、あら／＼かたつてきかせ申へし、（寛永版 18）
くはらんくはせうは、さかり松の其下にて、御経のこゑ聞えけるを、

ほりおこしてごらん候へは、玉をのへたることくなるなんし也、（江戸版 44）

しかし、観客への待遇表現が必要な絵解きとは違い、説経では登場人物への過剰なほどの敬語はあっても、聞手への敬語はない方が原則ではないかと思う。

演奏者は物語世界に没入してひたすら語り、聴衆は操りを見ながら、ある場合は操りなしで音楽を伴った語りを聞き、物語人物に共感同情する。語り手は自己の芸を尽くして聴衆を物語中に引き込もうとし、聴衆に対者敬語を使わないのもその理由による。古い説経のゴザアルと、現代説経節のゴザアル、ゴザリマス（古ザリマス）の用法はその点で通じており、へ地の文のゴザアルは、やはり登場人物に対する尊敬語と考えるのである。

注

- 1 ササラを捨てて、三味線を使うようになったのは、三味線の流行によるが、恐らく劇場進出がきっかけで、寛永八年（一六三二）より少し前のことであろう。（室木弥太郎『説経集』解説 新潮日本古典集成 一九七七年）
- 2 室木弥太郎『語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』（風間書房 一九七〇年）

盛田嘉徳『中世賤民と雑芸能の研究』（雄山閣出版 一九七五年）

〔付記〕 杏林大学教授国松昭先生、阪田雪子先生、説経節演奏家若松小若太夫（小峰孝男）氏よりご助言、ご教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。